会長講演

神経発達症群の生物学的研究と子どもの疫学研究

中村 和彦

弘前大学大学院医学研究科　神経精神医学講座

昨今大学改革がすすみ、臨床、研究、教育と忙しくなる中、働き方改革のこともあり、臨床医の研究時間が少なくなっています。臨床医がどのように研究を行えばよいかという点は、大きな課題です。

神経発達症群に関する生物学的研究は遺伝子解析、画像解析、モデル動物など多義に渡ります。例えば遺伝子解析は他の精神疾患には遅れて、神経発達症群の研究も行われました。両親と子どものトリオサンプルによる家庭内相関解析は連鎖不平衡を検出できる有意義な解析方法の一つです。私たちは、名古屋市のアスペ・エルデの会を主宰する、中京大学の辻井正次先生と共同で、自閉症のトリオサンプル収集を行いました。250 トリオのサンプルを集め遺伝子解析を行い、自閉症特異的な CNV 領域や関連遺伝子候補を示しました。

浜松ホトニクスの頭部専用の PET を用いて共同研究を行いました。PET は Positron Emission Tomography（陽電子放出型断層撮影） の略称で、陽電子（ポジトロン）の体内分布を画像化する撮影法です。トレーサーに関しては神経伝達系の、受容体、トランスポーターなどに結合する様々なトレーサーがあります。最初に注目したのはセロトニン系です。20 人の自閉症の方と 20 人の対照群のセロトニン・トランスポーターを比較し、「こころの理論」の障害の程度、こだわり症状の程度を検討しました。結果は自閉症者ではセロトニン・トランスポーター密度が全般的に低下し、帯状回のセロトニン・トランスポーターが低下していると、こころの理論の障害が大きく、視床の部位でセロトニン・トランスポーターが低下していると、こだわり症状が強いことがわかりました。自閉症はセロトニン系に関する機能障害であることが推測されました。

次に、学校コホート研究について説明します。我々は弘前市において、2014 年から 2023 年まで弘前市の小学生と中学生に対して毎年こころの調査を行っています。研究の一つを紹介します。児童青年期のうつ病は大人より頻度が高く、うつ病のスクリーニングのスケールによる早期兆候の把握は臨床的に重要です。PHQ-A(Patient Health Questionnaire for Adolescents)は DSM-IV-TR に準じて児童青年期のうつ病をスクリーニングするツールです。2020 年 7 月に、弘前市内全ての国公立小中学生: 11370 人に対して調査を実施しました。PHA-Q の値から、1;ないか少々の抑うつ: 4198 (66.0%)、2;軽い抑うつ:1444 (22.7%)、3;中等度の抑うつ: 478 (7.5%)、4;比較的強い抑うつ: 190(3.0%)、5;強い抑うつ:54 (0.85%)でした。強い抑うつを示した子どもが、支援につながっていた人数は限られ、抑うつ状態の子どもが気づかれないまま一定数おり、学校と連携して早期介入を検討しています。

特別講演 1

日本の中世・近世史に影響を与えた津軽の秘史 —史実と空想の狭間で—

大熊 洋揮

国立病院機構 弘前総合医療センター 院長・弘前大学名誉教授

近世までの津軽は辺境の地、流刑の地、蝦夷の地として中央から認識されてきた。しかし、その中で中央の動向に大きな影響を与えたと考えられる事象も複数散見される。今回はそのうちの 2 つを取り上げて、史実の中に空想を織り交ぜて話を進める。

1）鎌倉時代：津軽は鎌倉時代初期、北条義時の頃から得宗領（執権北条氏の直轄領）として北条氏の支配下に置かれた。北辺の地を得宗領とした必要性に関して様々な理由が挙げられているが確定的なものはない。一方、鎌倉時代中期に武蔵国武士団の間で発祥した板碑が同時期の津軽においても大量に発見され、中央の文化が早期から移入されたことが窺える。また藤崎に古くから伝わる唐糸御前の伝承（北条時頼の廻国伝説）もある。これらから津軽の地は鎌倉幕府においては監視すべき要注意地域として、中央からの武士（地頭）が継続して派遣されていたと推察される。その理由として十三湊と藤崎で栄えた安藤（安東）氏の存在があり、特に十三湊安藤氏は平泉・藤原氏と姻戚関係を持っていた。これらから北条氏の警戒の理由として、義経北行伝説の中の終着地が十三湊であった可能性が浮かび上がる。

2）江戸時代草創期：初代藩主・津軽為信が築いた弘前藩は、江戸幕府から信任され安泰であったように思われがちである。しかし、弘前城の館神本殿稲荷祠に秘祀されていた豊臣秀吉の小坐像が明治になり発見された。これは石田三成の次男・重成により津軽に持ち込まれたもので秀吉に対する忠義の印ともされている。1607 年の為信とその長男の信建の相次ぐ急死は、陰の豊臣方勢力を排除しようとする江戸幕府による暗殺の可能性が否定できない。その後、二代藩主・津軽信枚の擁立および藩の改易を巡り弘前藩と江戸幕府の熾烈な暗闘があり、その中核には家康お抱えの天海と為信に仕えた軍師・沼田面松斎との駆け引きがあったと推察される。沼田面松斎は西近江～若狭の出身であり、美濃を離れその地で雌伏の時を過ごした明智光秀と交流を持った可能性が高い。これらから天海の出自に関する俗説にまで話が広がる。

以上、史実の間を空想で繋ぐことで、さまざまな物語を紡ぐことができる。そのうちのあるものは真実かも知れない、と思いを馳せるのも歴史の楽しみ方の一つである。。

特別講演 2

療育手帳に係る判定基準統一化の検討進捗報告および実施協力について

中山 美恵

厚生労働省 社会援護局 障害福祉部 企画課

療育手帳は、現時点で法的な位置づけはなく、各自治体が運用しており、自治体ごとに検査方法等の判定方法や、ＩＱの上限値や発達障害の取扱い等認定基準にばらつきあり、手帳所持者が他の自治体に転居した際に判定に変更が生じる可能性や、正確な疫学統計が作成できない状況等が指摘されている。

現在、厚生労働省では、療育手帳制度の運用の地域差により不都合が生じることがないよう、全国統一的な運用を目指すべきという意見があることを踏まえ、国際的な知的障害の定義や自治体の判定業務の負荷等を踏まえた判定方法や認定基準の在り方、比較的軽度な知的障害児者への支援施策の在り方、統一化による関連諸施策への影響及び法令上の対応等も含め、療育手帳の交付判定や、知的障害児者の地域生活に対する必要な支援の検討等において、全国の自治体が広く活用できる、知的能力・適応行動に関する簡便かつ効果的な評価手法の開発と検証を行うことを目標とした研究を行っている。

本研究では、全国の自治体が広く活用することが可能な、知的能力・適応行動に関する簡便かつ効果的な評価手法の開発、評価手法による判定結果と必要とされる支援の内容との関係性に関する、実際のデータに基づいた検証の実施等に取り組んでいる。

特別講演 2

これからのこども政策について

杉本 拓哉

こども家庭庁 支援局 障害児支援課

令和５年４月１日、こども基本法の施行と同時に、「こどもまんなか」をスローガンにこども家庭庁が発足した。「こどもまんなか」とは、こどもに関する取り組み・政策を社会のまんなかに据えて、全ての子どもたちがその命を守られ、自分らしく、健やかに、安心して過ごすことができるよう、常にこどもの最善の利益を第一に考えることを指す。そして、「こどもまんなか」の社会の実現に向けて、今後のこども政策の基本方針となる「こども大綱」を策定するために「こども政策推進会議」「こども家庭審議会・各部会」において、議論を進めていただいている。併せて、公式ホームページでこども若者の意見表明の場を設定したり、こども・子育てにやさしい社会づくりのためのニーズ調査を実施したりするなど、当事者の意見を政策へ映させる取り組みも実施している。また、こども大綱の策定に先立ち、本年６月 13 日には「こども未来戦略方針」が、同月 16 日には「経済財政運営と改革の基本方針（骨太方針）」がそれぞれ閣議決定され、少子化対策や貧困問題、ヤングケアラーや障害児等、すべてのこどもと子育て世帯への支援が明記された。

本講演では、上記の大綱や指針の説明に加えて、学会のテーマである「子どものこころの発達と未来への展望」に関連した、こども家庭庁が進める取り組みについて紹介する。

先達に聞く

最近の病態にみる思春期発達の問題 - 前々思春期の提唱 -

牛島 定信

市ヶ谷ひもろぎクリニック名誉院長

最近、ことに21世紀になって病態の変化が著しいことはあまり注目されていないようだが、臨床的にも学会の目標の点から言っても重要なことのように考えている。例えば、境界性パーソナリティ障害の診断基準（DSM）を例にとってみても、その主題に「見捨てられ不安を基盤にした問題行動（自傷行為）に走り周囲を操縦する」という側面があるが、最近のケースでは操縦の雰囲気はほとんどないのである。むしろ、無力とさえ感じることが多い。私の観察によると、慢性の不安とも抑うつともつかない、つかみどころのない状態に多少とも強迫的であったり、社交不安的であったり、身体表現障害的であったり、感情暴発を起こしたりするが、周囲を巻き込む傾向はほとんどないのである。むしろ否定的な自己像、社会的不器用さのため社会的、職業的あるいは他の重要な領域で機能不全を起こしているのである。そして、治療を進めていくと決まって児童虐待のエピソード（親の暴言暴力、夫婦喧嘩）を持っており、兄弟間の虐待体験を垣間みるのである。

20世紀後半に入って、かつての内因性精神病、神経症（心因性疾患）、精神病質の区分の間隙を縫って境界例なる概念が登場したが、ここで問題になったのが自我同一性の障害である。問題の焦点が小学校高学年から中学に掛けて母親の価値観を抜けだして同性同年配の集団に入ることの困難とされた。ここで、P.Blos が新たに前思春期なる概念を提示し一般に受け入れられたことは周知の通りである。いわば、境界水準で機能する人格の起源は幼児期の母子分離の問題に加えて同性同年配の形成問題が主要とされた。

ところが、最近のケースでは、時の経過とともに、思春期の発達過程で同性同年配集団（ギャング）の形成がみられなくなり、発達の主題が子どもの頃から続く親の支配となっている（親に否定的な扱いを受けた）。加えて、同胞（兄姉弟妹）間の問題を秘めたケースを見掛けることが多くなった。つまり、21 世紀のケースでは、一段階前の、両親を二階に挙げて兄弟で親批判をなし、頼る相手を隣近所のオジさんオバサンに移動させ、それに支えられながら社会に入っていくという潜伏期前期の発達課題が中心になっていると考えたいのである。

いわば、子どもの成長過程が大きく変化したと言わねばならない。幼児期、学童期、思春期青年期、成人期と比較的はっきりしていたのが、非常にあやふやになったのである。講演では私たち児童精神科医がこれらの問題をどう理解し関わっていくかを論じたい。